

しあわせの国ブータンに学ぶ

研究員 明石修



2017年11月13日に有明キャンパスにおいて第1回武蔵野大学しあわせフォーラム「ブータンの賢者に学ぶ幸せの実践学」を開催しました。その内容をご紹介します。

国民総幸福量（GNH）という独自の指標を打ち出し、国民の幸福の追求を政策の中心にすえた国づくりを進めるブータン王国。そんな世界が注目するしあわせの国から2人の賢者をお招きし、お話を伺いました。お招きしたのは、ネテン・ザンモさんとツェリン・ドルジさん。ネテンさんは、GNHの理念をローカルコミュニティで具現化するために地域経済のプロジェクトを主導されています。ツェリンさんは、僧侶という立場からエンゲージド・ブディズム（社会参画する仏教）という考え方にもとづき、自殺防止などの運動に携わられています。お二人のお話をご紹介します。

そもそもブータンではなぜGNHという独自の指標を考えられたのでしょうか。それは、国内総生産（GDP）の追求という通常の開発モデルが多くの問題をはらんでいくからだとしてネテンさんは語ります。「GDPの開発モデルでは、搾取や、競争に基づき、

力や裕福さを追求します。その結果、貧富の差が拡大し、自然環境に大きな負荷をかけています。」また、ツェリンさんは、そのような物質主義が、際限のない欲求や過度の競争社会を生み、それが精神的な抑圧、ひいては自殺の問題を引き起こしていると言います。そのような負の側面を持つGDP型モデルに替わるものとしてGNHが考えられたのですが、GNHの中核をなすものは「関係性」、つまり人間同士の関係性、人間と自然との関係性だとのこと。そのような考え方のもと、GNHでは1. 公正で公平な社会経済の発達、2. 文化的、精神的な遺産の保存、促進、3. 環境保護、4. しっかりとした統治を柱としています。そして、私自身がなにより感銘を受けたのは、GNHが単なる理念だけではなく、実際に国づくりの中核に据えられていることです。すべての法案や政策は、GNHの考えに沿っているかという視点で検討され、それに通らないものは実行されないとのこと。まさに、しあわせを「カタチ」に国づくりが行われています。ただし、ブータンにおいても課題はあり、外国から新しいシステムや情報などが流れ込む中で、しあわせの価値観について議論が行われているとのこと。しあわせとは何かを問い、いかにそれをカタチにするかを考える、研究所のテーマにふさわしい機会となりました。